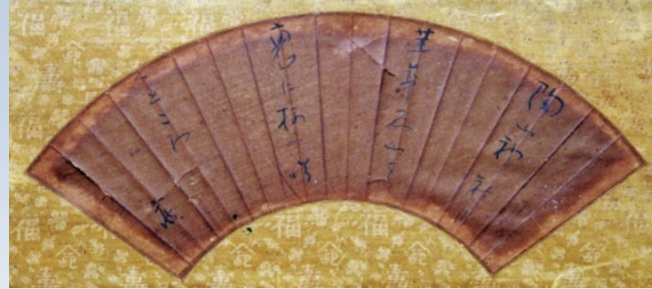




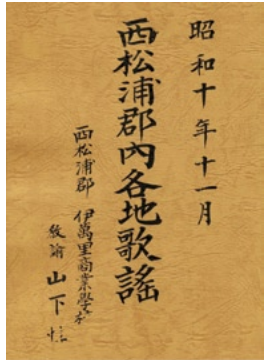
本当は10番まであった 有田皿山節

～「西松浦郡内各地歌謡」が伝える
新事実～



野口雨情染筆の扇面（有田商工会議所蔵）

このほど、有田町文化財保護審議会委員でもある佐賀市在住の金子信二さんより「西松浦郡内各地歌謡」という書籍を寄贈していただきました。これは



「西松浦郡内各地歌謡」の表紙

昭和10年11月に伊万里商業学校の教諭・山下惇先生が書かれたもので、伊万里市史編纂時に当館の古文書教室講師でもある前山博先生から提示されたとのこと。市史の掲載には間に合わなかったけれど、貴重な資料なので何とか形にしておきたいという思いから、山下先生の文章を翻刻し、金子さんが解説をつけた形で自費出版されました。

そもそも山下先生がこの調査・出版をしようとしたきっかけは日々生徒と接していて、その中に「捨てがたい特質を見、虚飾に覆われないありのままの純情を感じた」こと、そして「その子どもたちを今日まで育てた郷土の色彩や事情にも特別な親しみを覚えるに随い、この郷土の美を力の限り明らかにし、ゆるぎない正しい郷土愛に生きたい。願いは我々の父祖の地、郷土への理解と愛情とをふかめ、ひいては祖国の民たるの感激に至る」と記されています。

収集された地区は伊万里と有田で歌われていたものが中心で、豆まきの言葉として南山地区の「七福神」の口上や、有田や曲川村地区で歌われていた田植え歌や田の草取りの歌も紹介されています。

また、民謡其の他の項目に「有田小唄」として、現在「有田皿山節」という曲名になっているものが紹介

されています。「ハア～有田よいとこ弁天公孫樹 空に黄金の葉を散らす」で始まる、おなじみの曲です。この本には今は歌われていない5番以降の歌詞がありました。例えば「川の水から磁石のものを 知った陶祖の李参平」、「春は猿川八幡様の 鬱金桜の花が咲く」、「夏は涼しく有田の町は 暑さ知らずの白河谷」など、有田の四季や歴史までもが歌いこまれています。

この歌詞は作詞家の野口雨情が作ったものです。雨情は昭和9年12月4日に来町し、その日は当時上有田駅前にあった丸屋旅館に投宿。翌5日に鹿島へ向け出発したことが有田町役場日誌に記載されています。現在、歌い継がれているのは5番までですが、雨情はそれら5つの歌詞を揮毫して町の関係者に贈っています。一つは現在、有田商工会議所で所蔵されている「陶山神社は 蓮華石山の 裏に桜の咲くところ」という歌詞で、扇に文字が記されています。

もう一つ、「見せてやりたい 他国の人に 有田石場は (の) 野 (露) 天掘り」は当時の有田町長だった青木幸平さんに贈られていて、現在子孫の青木家に所蔵されています。山下先生が出版したのは昭和10年ですから、この「有田小唄」はまだ一般にはそれほど知られていなかったのかもしれませんが。

曲がつけられ披露されたのは昭和31年4月22日ですから、その時に元々は10番まであったものが半分になったのではないかと推測されます。

この原著者の山下惇先生がどのような方だったのか、金子さんが探されたそうですが、わずか80年ほど前のことながらよくわからなかったとのこと。どなたか、ご存知の方がいましたらご一報ください。

(尾崎 葉子)



野口雨情(1882～1945)は茨城県多賀郡磯原村(現北茨城市)生まれの詩人。明治40年、小川未明、三木露風らと早稲田詩社を創立し、大正中期の児童文学運動に参加。「十五夜お月さん」「青い目の人形」などの童謡を作り、また「船頭小唄」「波浮の港」などの創作民謡も手掛けた。

皿山

季刊

No.98

夏
2013

常設展示の紹介

～「展示ガイドブック」ができました～

有田町歴史民俗資料館東館（以下、資料館）は、昭和53年に開館した有田の歴史・民俗資料等を展示する施設です。また、資料館とは渡り廊下で繋がる隣接の有田焼参考館（以下、参考館）は、窯跡等の出土陶片を展示するため昭和58年に完成しました。両館では、これまでも常設展示のガイドブックの要望が多く寄せられていました。そこで、平成23年度の参考館の展示内容の一新、また、翌24年度の資料館の展示キャプションの更新及び一部展示替えを機に、ガイドブックの作成も企画し、ようやく今年3月に完成しました。この機会に常設展の概要をご紹介します。

資料館の展示は、「くふう」、「つくる」、「くらす」、「しるす」、「すまう」のタイトルを冠し、参考館の「あゆみ」を含めて、6つのコーナーで構成しています。

「くふう」は“技術の歴史はかたる”のサブタイトルのとおり、江戸時代から現代に至る有田焼について、国内最大の磁器生産地として発展することができた要因を、技術や生産体制の“くふう”の側面から概観してみようという試みです。窯焼き（窯元）を営む際の許可証である“釜焼名代札”やそこで働く際に必須の“職人札”と称される木札など、今ではほとんど現存しない貴重な資料も展示しています。また、明治のヨーロッパからの技術導入による顔料や焼成技法の変化、郵便ポストや硬貨、手榴弾をはじめとする戦時中の金属代用陶磁の数々、現代の有田焼が伝統を守り、一方では新しい焼き物を創造する姿勢なども紹介しています。

「つくる」“焼き物の道具はかたる”のコーナーでは、有田陶磁美術館蔵の『染付有田皿山職人尽し絵図大皿』に描かれた磁器生産の工程に沿って、実際に使用された道具類の数々を展示しています。もちろん、これだけ道具類が揃う施設はほかにはありません。



有田町歴史民俗資料館東館の展示風景



書名：有田町歴史民俗資料館
東館・有田焼参考館
展示ガイドブック
規格：A5版 36ページ
価格：300円
販売場所：有田町歴史民俗
資料館東館

「くらす」“生活の道具はかたる”では、江戸時代から昭和初期ごろまでに有田で使用された、衣・食・住に関わる民具類を展示しています。その中には、火鉢や味噌がめをはじめ、年配の方々には懐かしいものもたくさんあります。

また、現在は資料整理のため一時閉鎖中ですが、「しるす」“文字はかたる”と題した有田に関わる各種の文書資料も多数保管しており、ほかに「すまう」“町並みはかたる”とした国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている、有田内山の町並みに関するパネル展示なども行っています。

次に、参考館は、作陶や歴史研究などの参考とすべく、有田の窯跡出土品等を展示するための施設です。残念ながら、開館当時はまだ発掘調査事例が少なく、有田焼の400年を語るには力不足の感は否めませんでした。しかし、今日では隣接する有田町出土文化財管理センター等に膨大な量の出土陶片類を保管しており、その中から厳選して千点ほどを展示しています。

「あゆみ」“陶片はかたる”と題した展示では、有田における窯業の成立から順を追って年代別に陶片を展示しています。各展示ケースに添付したキャプションでは、展示陶片が誕生する時代背景や技術革新の状況などを、写真や図もふんだんに用いて解説しています。つまり、この展示そのものが有田の窯業の通史となっており、書籍などと異なり、本物の陶片によりそれを堪能できるのが大きな特徴です。

ガイドブックでは、こうした展示の内容に沿って、できるだけ分かりやすく解説するように努めました。また、有田焼の歴史を短時間で通観できる小冊子としても、十分お役に立てるものと思います。（村上 伸之）



有田焼参考館の展示風景

アンティグアで発見された 有田焼



サント・ドミンゴ修道院遺跡から出土した有田焼 (Courtesy: El Proyecto Arqueológico Hotel Museo Casa Santo Domingo)

アンティグア—哀愁のある響きをもったこの町は、かつて大きな災禍に見舞われた古都です。スペイン植民地時代の中米グアテマラの首都として栄えましたが、1773年のサンタマルタ大地震で壊滅的な被害を受け、首都機能も現在のグアテマラシティに移されました。現在のアンティグアには町の至るところにかけて壮麗さを競った教会や修道院の廃墟がそのまま残されています。首都の賑わいは失いましたが、アグア火山の麓に広がる美しい町並みは世界遺産にも登録されています。

この町へはるばる出かけるきっかけとなったのは、アメリカの論文雑誌 Oriental Art にアンティグアから出土した中国磁器片を紹介した論文が掲載されたことでした。論文の写真を見ると、確かにほとんどは中国磁器だったのですが、数片の見覚えのある陶片が載っていました。どう見ても 17 世紀の有田焼でした。

そこでこの町の出土遺物を調べようと今年の秋に訪ねました。日本からロサンゼルス経由で 26 時間かけて、グアテマラの空の玄関口であるグアテマラシティに入り、さらにそこから車で移動して、夜中に宿に着きました。交通網が発達した今でさえはるか遠くに旅した気持ちがしますから、17 世紀に有田焼が運ばれた当時の帆船と陸路による旅は現在の私たちにとっては想像できないぐらいの長旅だったことでしょう。

さて、肝心の有田焼ですが、サント・ドミンゴ博物

館の地下倉庫に収蔵されているサント・ドミンゴ修道院遺跡とベアテリオ・インディアス遺跡の出土品の中に 20 数点の有田焼の陶片を発見しました。いずれも 17 世紀後半に有田の内山地区などで焼かれた染付や色絵製品です。大半が皿とカップで占められています。かつて有田焼の販路は遠くグアテマラまで伸びていたのです。

グアテマラと言えば、今ではコーヒーの方が有名ですが、当時のこの町で好まれたのはチョコレート（ココア）でした。そして、使われていたカップもチョコレートカップでした。遺跡から数多く出土しています。出土遺物の全体の傾向は、これまで調査を行ってきたメキシコの各都市とよく似ています。同じスペインの植民地として、需要が共通していたのでしょう。

メキシコのアカプルコまでは、マニラから太平洋を渡って運ばれたことがわかっています。その先のアンティグアまでの流通ルートについては、一つはアカプルコから大陸沿いに、海路でグアテマラに至り、港から陸路でアンティグアまで運び上げるルート。もう一つはアカプルコからメキシコシティに運び上げた後に内陸部の陸路で運ぶルートの二通りが考えられますが、まだはっきりしません。不明なことの方が多く、ラテンアメリカ研究には課題がまだまだ残されています。

(野上 建紀)



有田焼が出土したサント・ドミンゴ修道院遺跡



遺物の収蔵庫と調査を手伝ってくれたサントスさん

古文書教室研修旅行に行ってきました。

好天に恵まれた4月9日(火)、恒例になった古文書教室の研修旅行を行いました。参加者は20名、今回は福岡県の九州国立博物館と筑紫野市歴史博物館に向かいました。

まず九州国立博物館でトピック展「江戸のモダニズム～古武雄」展を見学。これは今年の秋に九州陶磁文化館の企画展でも紹介されることになっており、参加者はいち早く古武雄の大胆な文様を目にすることができ、その魅力に引き付けられていました。次に筑紫野市歴史博物館に向かい、主任主査の山村淳彦さんに館内の説明をしていただきました。筑紫野市歴史博物館



筑紫野市歴史博物館を見学する様子

は古文書修復の先進地として活動されており、参加者も次々に質問をして、充実した研修を終えることができました。

夏休み 子ども向け 体験教室のご案内

有田町歴史民俗資料館では小学生を対象に下記の講座を行っております。詳細は7月上旬に、各小学校を通じてご案内いたします。ふるってご参加ください。

※ 予定は変更する場合があります。

① 第13回 町屋模型作り教室

対象：小学校5、6年生 定員：10名

日程：8月19日、20日の2日間(予定)

有田内山地区にある伝統的な町屋の模型を作成します。完成品は持ち帰り、夏休みの自由研究にすることもできます。

② 第2回 歴史の川ざらい ～ベンジャラを探そう！

対象：小学校4年生以上(保護者の同伴があれば3年生以下も可。大人の参加も受け入れます)

日程：未定(夏休み中の平日と休日、計2回)

定員：各15組(計30組)

有田を流れる川の中で陶片を探し出すと、それがいつ、どのように作られたのか、学芸員がお答えします。(※ 見つけた陶片は持ち帰ることはできませんが、参加者を採集者として記録し、資料館で展示します)

新刊案内

『松林靄之助 九州地方陶業見学記』

この本は、京都市立陶磁器試験場付属伝習所特別科で学んでいた松林靄之助さんが、大正8年に約1ヶ月をかけて、有田をはじめ九州地方の窯業地へ赴き、当時稼働していた登り窯などを実測し、焚き方や燃焼時間、原料などを調査し、克明に記録を残していたものを、立命館大学の前崎信也氏が翻刻し、解題を加えたものです。

大正期の有田地方の窯業史の一端がわかる、貴重な出版物となっています。是非、お求めいただきご一読くださいますようお願いいたします。松林靄之助さんに関しては、館報91号をご覧ください。



書名：松林靄之助

九州地方陶業見学記

編者：前崎 信也

発行：株式会社宮帯出版社

規格：四六判 346 ページ

価格：3,780 円

販売場所：有田町歴史民俗

資料館東館

ありたれきみん 応援団 発足!!



4月23日(火)、当館や文化財課の活動に対して、人的支援を行うボランティア組織「ありたれきみん 応援団」の発足式を開催しました。式には九州陶磁文化館館長にもご臨席いただき、団員の皆さん

には教育長より委嘱状をお渡ししました。

任期は一年で、今後展示解説や資料館の企画など、様々な支援をしていただくこととなります。人員的にも予算的にも厳しい現状の中で、このように多くの方々の応援をいただくことができ、とても心強く思っています。

これから団員の皆さまと共に、有田の歴史を調査し、その情報を共有・発信していきたいと思っております。

季刊『皿山』

通巻98号(平成25年6月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL : <http://rekishi.town.arita.saga.jp>